

CLC からしだね書店便り

2
2022
February

CLCからしだね書店では…

- 1 キリスト教書が中心ですが、福祉、心理、精神、哲学、児童書、その他一般の良書もたくさん揃えたいと思います。
- 2 お洒落 でかわいい雑貨や小物もあります。
- 3 ブックカフェとして、ドリンクやスイーツ、ランチも提供しています。ゆっくり本を読みながら、お過ごしください。
- 4 コーヒーを飲みにきてくださるだけでもけっこうです。
- 5 図書コーナーも併設予定です。ドリンクを片手に、お好きな本を手にとってお読みください。
- 6 古書のコーナー始めました。ほりだしものあります。
- 7 読書会や著者を招いての講演会など、人と人が出会い、つながる「対話」の場を提供します。

「読書感想本」

いま「教会」が問われている…

『精神障害とキリスト者
そこに働く神の愛』

そこに働く神の愛』

石丸昌彦 監修

日本キリスト教団出版局 2020



本書は、キリスト教月刊誌『信徒の友』に、2017年から2年間にわたって連載された

「シリーズ精神障害 そこに働く神の愛をめぐって」を書き綴ったものである。連載は、まずこのテーマに沿った様々な立場の方々11名の実践紹介や自身の体験談、問題提起などが掲載され、その次の号で、精神科医の石丸昌彦氏が、専門家の立場からこれに対するレスポンスを投稿するという形で続けられた。寄稿者は、精神障害のある当事者をはじめ、教会の牧師や信徒、福祉事業の実践者など。加えて『信徒の友』編集部からの投げかけ、発信がところどころに入る。本書の構成もそれを踏襲したものとなっている。

投稿者が語るひとつひとつの物語それ自体、すでに多越えていくもの。その先にこそ、きつと主のからだである教会の姿があるのではないかと。

「躁うつを抱えて教会すること」というテーマで、真実な証言を綴っておられる方もいた。召命の声を聴いて牧師になったものの、「向いていない」自分との葛藤の中で、躁とうつを繰り返し、ついに入院。その後回復して「障害を持つ」牧師を招聘してくれる教会に赴任。在任中10年間の入退院は14回にも及んだという。投稿者は、「力は弱さの中でこそ十分に発揮される」（Ⅱコリント12:9）の聖句を引用して、「教会が弱さを包み隠さず居られる場であれば、多様な枝が一本の木となっていく」と語る。石丸氏のコメントには、「牧師はかくあるべし」という固定観念の呪縛から私たちは解放されるべきだ、とあった。

「教会共同体を社会資源に」という福祉作業所の実践例の紹介もあった。教会として、信託者として、社会の様々な課題にどう関わるか、という問題提起でもあった。

くのメッセージを含んでいるが、監修者石丸氏による、キリスト者の視点からのコメントによって、読者はさらに深い考察に導かれる。



たとえば、統合失調症の息子さんを持つお母さんが、所属する教会の中で息子さんが引き起こす様々な人間関係のトラブルをめぐって、親として、教会員として、間に立つて苦労するエピソードがある。息子さん本人はもちろん、母親も、牧師も、教会のメンバーたちも、「トラブルによって経験値を上げ」ることになったという。この記事への石丸氏のレスポンスのタイトルが「教会に集まる当事者たち―健全な距離感と経験をもって」となっていた。トラブルや軋轢は避けるのではなく、乗り

「精神障害と教会」というのは、じつはどこにでもある、古くて新しいテーマであろう。

こころの病気、精神に障害のある方々にとって、人間の内面の問題や生き方について語られる教会が、自然に足を運ぶ行き先となるというのは、ある意味で自然である。教会もまた、広く人々に門戸を開いている。主にある聖徒の交わりに、病気や障害の有無など関係なく、偏見差別もあるはずはない。愛と正義が語られる教会こそ、この世において、その実践の拠点である。……と言いたるところだが、現実はどうであろう？

本書は、精神障害と教会に関わる様々な問題を切り口として、主のからだである教会が「この世」に在る意味について、そしてキリスト者としての生き方について、様々な角度から、私たちに問いかけている。

(T・S)



春山さんの祈り



春山さんの小さい丸っこいからだの上には、丸っこくはげ上がった頭がのっかっている。その愛すべき風貌と、温和で実直な人柄をしつくり溶かし合いながら、春山さんは素敵に年を重ねてこられた。

春山さんは牛乳屋さんで、それからクリスマスチャンであった。雨ニモ負ケズ風ニモ負ケズ、毎朝牛乳を配達し、ひたすら神様を見上げつつ生きてきた人物なのである。

ずいぶん前の、あるクリスマスのお祝い会のこと。

教会のお年寄りたちの出し物で、賛美歌合唱をしようということになった。十人ほどのおじいちゃんおばあちゃんはずらりと舞台上に立ち並び、美しいピアノの音色とともに、麗しいハーモニーが響き渡るはずだった。ところがである。舞台の真ん中で足をふんばって立っていた春山さんの真ん前に、一本のマイクが、でえんと居座っていることに誰も気を留めなかったのである。

春山さんは、とびっきりの音痴であった。

無情にもマイクは、春山さんの声以外はかたくなに拒否した。その結果、ピアノ伴奏とはまったくかけ離れたところでうなっている春山さんの「きよしこのよる」だけが、教会の床をもぞもぞと這いまわりながら聴衆の足をくすぐるようになった。

予期せぬときに、予期せぬ形で春山さんの独唱にいくわしてしまった私たちは、とりあえずうろたえ、それから一斉にうつむいた。ある者は両手で口を抑え込み、ある者は自分の太ももをいやというほどつねって、こみあげてくるものをのどの奥に押し込んだのだった。隣に座っている友人は、顔を真っ赤にしながらもさげないふうを装って、トイレに立った。「その手があったか！」と私は思った。

歌声は、作曲者の意向などまるで無視して、見事にメロディーからはずれていたのだが、それでもご本人はいたって真面目。おなががよじれて死にそうな聴衆にも気づかぬ様子で、実に楽しみにクリスマスの喜びを歌い上げていた。

「こんなに心から笑ったのは久しぶりです。ありがとございました。今日のプログラムの中で、一番良かったです」

その日、初めて教会に来た人が、そんな言葉を残して帰って行った。

春山さんは、八十五歳を過ぎて、とうとう牛乳屋さんを廃業することになった。体力がついてこなくなったのである。そうしたら急に、本当に急に、物忘れが激しくなってしまった。同じことを何回も質問したり、とんちんかんなことを口走ったり……。

「父の」を叱りつけてしまう自分が悲しい」

春山さんの娘さんが涙を浮かべながらそう言うのを聞いて、私も悲しかった。春山さんにはいつまでも春山さんのままでいてほしかった。そんな私たちの思いを背に受けながら、春山さんは礼拝堂の前から2列目のいつもの席に座って、日曜日ごとに礼拝を守っていた。

梅雨に入ったばかりのうつとうしい日曜日、牧師さんの説教がすみ、礼拝も終わりに近づいた。

「それでは今日の礼拝を締めくくりにあたり、春山さんに祈りをささげていただきましょう」

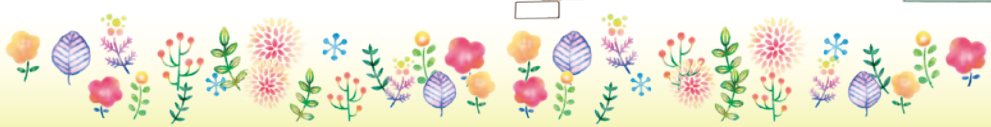
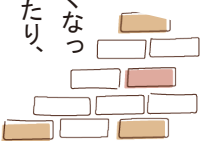
胸がどきん、と鳴った。牧師さんは今、ためらうことなく春山さんの名前をあげた。大丈夫なんだろうか。みんなの前でちゃんとしたお祈りができるんだろうか。

春山さんは静かに立ち上がった。

「恵みとあわれみに富み給う、ご在天の父なる御神様、今日こうしていつもとかわらず、礼拝の座に待てることをお許しください、まことにありがたく感謝申し上げます」

春山さんが祈り始めた。その声は、しっかりと力強く、ときおり文語の御言葉が美しく格調高く散りばめられ、耳を傾ける者のたましいを揺さぶるような響きがあった。

そのとき、私はあのクリスマスの夜を思い出した。止めようにも止まらない笑いの中で、春山さんの真実な祈りに触れた、あのあたたかなクリスマスの夜のことを。



古書部よりお願い

ガンバレ 子どもたち 参考書で 応援プロジェクト

ご家庭で使わなくなった「学習参考書」「受験参考書」はありませんか？
古書として献本いただけますと幸いです。
からしだね書店では、家庭の事情により、
十分な参考書が買えない子どもたち(小・中高校生)に
皆さまからお譲り頂いた参考書を無償で提供し、
学習や受験に役立ててもらおうと考えています。
ぜひご協力ください。



(例) **学習参考書、問題集、辞書類、文具**
などなど以下の条件に合うものをお願いします。

①
内容が
古くなっていない
もの

②
書き込みや
線引きが無い
(少ない)もの

③
本そのものが
傷んでないもの

3月下旬の土曜日の午後(3月26日頃)、からしだね館で

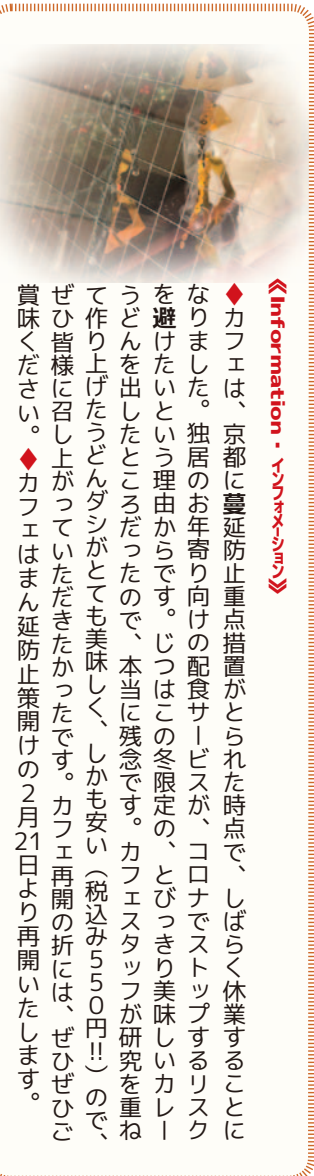
「学習・入試参考書 無料配布大会」

を開催したいと思っております!!!

提供者としてご協力を、そして小・中高の子どもたちのご参加を、
こころよりお待ちしております。

詳細は未定、近々にお知らせいたします。

店頭掲示物または、HP (<https://karashidane.or.jp/>) で
ご確認くださいませ。



《Information・イベント》

◆カフェは、京都に蔓延防止重点措置がとられた時点で、しばらく休業することになりました。独居のお年寄り向けの配食サービスが、コロナでストップするリスクを避けたいという理由からです。じつはこの冬限定の、とびっきり美味しいカレーうどんを出したところだったので、本当に残念です。カフェスタッフが研究を重ねて作り上げたうどんダシがとても美味しく、しかも安い(税込み550円!!)ので、ぜひ皆様に召し上がっていただきたいかったです。カフェ再開の折には、ぜひぜひご賞味ください。◆カフェはまん延防止策開きの2月21日より再開いたします。

老いるということは、かなしい。けれど、決して絶望することなんかはないんだ。体も頭もうまく働かなくなるだろうけれど、人が自分の中で大切に育んできた一番美しいもの、それだけは老いてなお、みずみずしく働いてくれる。
春山さんの祈りが終わった。アーマン、と和しながら、ふと考えた。
私のなかでいつまでも残る一番美しいものは、しっかりと根付いているだろうか。
ただしき者よ エホバによりてよろこべ 讚美はなほきものに適はしきなり
詩篇33篇1節



自分には愛されるべき存在である、ということを感じることが難しい幼少期を過ごした毒舌バービーさん。自分への信頼、他者への信頼、社会への信頼を喪失したかのような彼女に、彼女自身も、そして周囲の人も、誰かとあなたかような関係を維持することは難しいだろう…とあきらめていました。



京都市東部障害者地域生活支援センター・からしだねセンター主任
武山 世里子（精神保健福祉士・相談支援専門員）

からしだね館ecomi
こころの病む人の支援

毒舌バービーさんは、常に「彼氏っぽい」人がいます。なぜ「彼氏」ではなく「彼氏っぽい」のかというと、「声をかけてくる人は自分の外見で近寄ってくるだけ。そういう人やってわかって付き合ってるし、ほんまの彼氏とはちゃうねん」という理由のためです。「こころを開いたらあかん」と自分に言い聞かせているようにも見えます。比較的年齢の離れた年上の男性が彼女の近くにいる気配はするのですが、短い周期で変わっていきます。付き合った、別れた、をそれほど感情のない顔で話す彼女から、恋愛もどこか投げやりな感じを受けました。

毒舌バービーさんが別人に!??

しばらくは彼女からも、関係者からも連絡がなかったのですが、ある時、彼女の訪問看護師さんから連絡が入りました。「バービーさん、信じられないくらい別人になってるんです。ちょっと武山さん、彼女としゃべってみてください」もったいぶらずに詳しい説明をしてほしいと言ったのですが、訪問看護師さんは「とりあえずしゃべってもらったらわかるから」と教えてくれません。早速、彼女を訪問することにしました。

訪問の連絡を入れる時に私の頭の中では「めんどくさいなあ。寝てたら出えへんしな」という、いつもの決まり文句が浮かんでいました。しかし、彼女の返事は「そっなんっちゃうど武山さんに報告したいことあってん。来て来て〜」でした。彼女を訪問し、ドアのインターフォンを鳴らしました。いつもなら、何の反応もなく「カチャ」と鍵が開く音でその音を頼りに、そっつと中に入るのでありますが、「どっぞ〜！」と彼女の声が聞こえ、彼女自らドアを開けてくれたのです。そしてそこには、笑顔の彼女が!!!そしてここ最近の彼女に起こったことを話してくれました。

「おばちゃんカウンセラー」との出会い

彼女は、かかりつけの皮膚科で、隣に座った「おばちゃん」に話しかけられました。そして気づいた時には、よく知らないそのおばちゃんに自分の障害のことまで話していたのです。（彼女はそのおばちゃんのことを他人の話を引き出す名人「おばちゃんカウンセラー」と名付けました）そして、最後に、「ええ人おるから、紹介したげるわ。連絡先交換しよ」と言われ、ラインの交換をしました。

それから数日しておばちゃんからラインが入りました。「〇月〇日 駅前のカフェに来て。」
彼女がそのカフェに行くと、おばちゃんと背の低い丸顔の若い男性が先に来て待っていました。その男性をおばちゃんは自分の息子と紹介しました。彼には軽知的的の障害があって、支援学校に通っていたこと、卒業後に仕事の練習をする福祉の事業所に通っていること、とても優しい性格であること、そんなことをおばちゃんが一方的に説明し、「ほな」とどこかに去って行きました。

残された二人では会話も弾まず、注文したドリンクを飲み終えるまでの何とも言えない居心地の悪さを感じながら二人で店を出ました。彼女は当然そこで「バイバイ」となるものだと思っていたら、彼から「家に夜ご飯を食べに来ないか」と誘われたそうです。彼女はなぜか「ご飯、食べに行きたい!」と、言われるままに彼についていき、その夜は、彼とおばちゃんと彼の父親であるおっちゃんと一緒に鍋を食べました。

それからも彼から「ご飯食べに来ない?」と誘われ、気づいたら彼も彼の家族のことも大好きになっていました。

バービーさんの変化

彼はバービーさんと付き合ってから、障害をオープンにして働くことのできる会社に就職しました。週5日、朝の9時〜17時まで仕事をすることになった彼は、大変そうではありますが、仕事を覚えようと頑張っています。彼女は

からしだね館ecomi 障害のある方の生活全般の相談を受けたり、就労支援をしたりしています

その姿を見て、「彼が起きる時間に自分も起きて、彼が仕事をしている間は、ヘルパーさん任せにしていた家事に取り組みよう」と思うようになりました。幼少期に受けた虐待のために「できない」と避けてきた、洗濯や掃除も、少しずつできるようになっていきました。

彼の家族と一緒に食事をしながら、時々お手伝いを頼まれるそうです。もっとも調理ができるようになりたくなくて、彼女は、訪問に入っているヘルパーさんに、もっと調理を教えてほしいと頼んでいます。

役所に手続きをしないといけない時は、「あいつむかつくし、代わりにやって」と連絡が入っていたのですが、「本当は自分でやらなあかんけど、役所の人の説明が理解できひんし、一緒に来てもらえないか」との穏やかな相談の連絡に変わりました。

バービーさんを変えたもの

彼女に「どうしてこんなに変わったの？ その自覚があるか？」と尋ねてみました。彼女がくれた答えは、「今の彼女は、自分と一緒に障害があんねん。難しいことは理解できひん。でも、嘘をついたり、だましたりは絶対にしはらん。この前、ものすごい疲れて、朝どっしても起きれない日があったみたいやけど、私に『仕事を頑張る』ってゆったから、しんどいに行かはってん。約束は絶対守らはるねん。すごいやる」でした。

質問に対する回答とは言えませんが、それで十分でした。彼女が他者への信頼を回復し、自分に対する信頼も取り戻し、きつとこれから生きていく社会に対しても今までは異なる希望を持っている、そんなことが伝わってきます。

バービーさんの彼は、「難しいことは理解できはらん。でも、嘘をついたり、だましたりしはらん。」「そんな人です。弱さをもつ、誠実で、強い人を彼氏に持つバービーさんと話していると、今の彼女を「毒舌バービーさん」と言えなくなりました。

障書のこと福祉のごことで「こんなことを聞くとみたら」ということがあれば、ぜひ「」から「」だお書店(cic@karashidane.or.jp)までお知らせください。

《お知らせ・1》

◆教会や保育園、幼稚園等で、定期刊行物や新刊書、用品等のご注文をある程度まとめて頂きましたら、月1回、無料の定期便でお届けします。

◆お近くにキリスト教書店が無い場合など、ご希望により、新刊書や用品(グッズ)の訪問販売を検討させていただきます。ご相談ください。

◆再版発行のリクエストをお寄せください。絶版した良書で、再版してほしいものがありましたら、お知らせください。ある程度リクエストがまとまりましたら、出版社に情報提供したいと思えます。

《お知らせ・2》

◆から「だねの」

「おすすめ本スポンサー」システム
◆あなたのイチ押しの本を、
店に置かせていただきます。

「この本、ぜひ皆さんに読んでほしい」というあなたのおすすめ本。3か月間店頭においてみませんか？残念ながら売れ残ってしまったら、ご自分で買い取ってお友達にプレゼント…という仕組みです。(書店に在庫をためこまず、皆さまの「推薦良書」を広くご紹介いただける。…そうなたらいいなと思っています。)(店内配置等については、当店にお任せください。種類によっては、ご希望に沿えない場合もあります。

《お知らせ・3》

◆取次店から本が入荷されるのは、水曜日と金曜日の週2回です。お客様からの注文のタイミングや、取次店にも在庫がない場合など、お取り寄せに1週間以上かかってしまうこともあり、たいへん心苦しく思いますが、少し余裕をもってご注文いただけると助かります。お急ぎの場合はお知らせください。なるべく対処したいと存じます。キリスト教書店が町から消滅しないために、あえて書店に申し込んでくださっている皆様のお気持ちとお祈りに支えられていますことを、心より感謝いたします。

献本について お知らせ

たいへん申し訳ございませんが、
送料をご負担いただくと
ありがたいです。
(受付できないものもありますので
事前にお知らせください)

【献本をお願いしたい本の種類】

- 1 キリスト教書、キリスト教に関連した本（多少、書き込み等があっても、大丈夫です）
- 2 哲学、心理学等、人の生き方に関する本
- 3 社会の中で起きている問題を扱った本
- 4 暮らし（料理、健康、経済等）にかかわる本
- 5 小説（人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません）
- 6 漫画（人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません）

【本の送り先】

住所：〒607-8216 京都市山科区勧修寺東出町75 からしだね館

宛先：CLC からしだね書店 献本係 電話：075-574-1001 FAX075-574-0025

Mail：clc@karashidane.or.jp

【本と一緒にいただきたいもの】

以下の内容を記入したメモ

①献本者のお名前②ご住所③お電話番号④メールアドレス⑤さしつかえなければ、献本者の簡単なプロフィール、献本いただいた本の感想や思い出等を一言。⑥献本くださった方のお名前を書店だよりにご紹介させていただきたいと思えます。お名前の掲載は困るという方は、お知らせください。

【古本の売上を含む CLC からしだね書店の収益は、すべて、書店で働く障がい者の工賃になります】

【献本感謝】

竹内昌子様、大口美和子様、畑野研太郎様、奈倉道隆様、和田耕作様、藤井久美子様、福井文彦様、坂岡大路様、西村隆様、石川了様、高橋佐恵子様、磯野純子様、匿名様

編集後記

◆オミクロンが猛威をふるっています。身近なところにも、感染者が出るようになりました。◆書店のお客様も減っていますが、来てくださった方は、古書コーナーの前で、今はなかなか手にはいらなかったお目当ての本を探しあてたり、ついでに100円コーナーの文庫本に手をのばしたりしておられます。◆新しくエッセー「京都のかたすみから見える風景」をスタートさせることになりました。昭和の時代の教会や学校のことなんかを、「今」にからめながら書いていきたいと思えます。よろしく願いいたします。◆マスクをとって、みんなで思いっきり讃美歌を歌える時がくることを願いつつ。【店長】

編集・発行：社会福祉法人ミッションからしだね
就労継続支援A・B型事業所からしだねワークス
からしだね書店&カフェ・トライアングル

〒607-8216 京都市山科区勧修寺東出町75 からしだね館
書店電話番号 075-574-1001 FAX 075-574-0025
書店メール clc@karashidane.or.jp

CLCからしだね書店だよりの
バックナンバーはこちらから

